

YODEL



1

"山男にや惚れるなよ"

セロ弾きのモーリス

小柳 帝 | ROVA

山にもっとも相応しい音楽はと問われた時に、ボクが真っ先に思い浮かべるのは、バッハの「無伴奏チェロ組曲」である。パブロ・カザルスの名演でも知られるボクの大好きな曲だが、それにしても、アルプホルンでもなく、スイスアコーディオンでもなく、なぜ山にチェロが合うのか。それはおそらく、今から半世紀以上も昔に撮られた山岳映画『星と嵐』に由来する。アルプスの名ガイドとしても知られる登山家ガストン・レビュファが書いた山岳文学の傑作『星と嵐』の映像版として作られたこの映画の最後に流れるのが、「無伴奏チェロ組曲」だった。そして、クレジットこそないが、おそらくこの曲を演奏しているのが、ここで紹介するモーリス・バケだ。

バケをご存知ない方は多いと思うが、顔の描かれたチェロを弾く男を描いたサヴィニヤックのポスターに見覚えのある方はいないだろうか。実は、あのチェリストこそ、モーリス・バケである。バケは、コンセルヴァトワール出身のチェロの名手にして、俳優でもあった。ジャン・ルノワールの『ピクニック』のヒロイン、シルヴィア・バタイユと同じ前衛演劇集団「十月」に属していたこともあって、『ランジュ氏の犯罪』や『どん底』など、ルノワール映画の魅力的な脇役としても映画ファンにはつとに知られているが、アルベル・ラモリスの『素晴らしい風船旅行』で、気球の発明家の助手を演じていたのがバケだと言えばおわかりになる方もあるだろうか。あの映画でも、バスカル君を乗せた気球はアルプスを目指したが、実際モーリス・バケはアルビニストでもあった。それも、音楽や映画の仕事のかわたら山に登るような日曜登山家ではなく、ミディ針峰(エギュ・デュ・ミディ)の南壁を初登頂した、プロ顔負けのアルビニストだったのだ。その時にバケをガイドしたのが、ガストン・レビュファだった。



映画『星と嵐』を観ると、レビュファの華麗なクライミング技術を存分に楽しむこともできるが、本の方の『星と嵐』と同様、単なるレビュファの武勇伝のテクニカルな描写に終わらず、「山のサン＝テグジュペリ」の異名通りの美しい文体で綴られた本の方と同様、そこには山に登るものだけが知り得る自然の神秘、そして山に立ち向かう者同士の間に通い合う友情が描かれている。そして、この映画を単なる記録映画以上の詩情溢れる作品にまで高めたのが、共犯者バケの存在だった。

『ぼくの好きな先生』などで知られるフランスのドキュメンタリー作家ニコラ・フィリペールの作品に、「クリストフ・シリーズ」と呼ばれるものがあるが、これは現代のレビュファとも言うべき登山家クリストフ・プロフィの数々のチャレンジをドキュメントした作品群である。その中の『バケのカムバック』という短編は、御年77歳のバケが、今度はプロフィをガイドに、その数年前に他界したレビュファの死を悼むかのように30数年ぶりにミディ南壁に挑んだ時の映像だ。ここでフィーチャーされている過去の映像こそ、『星と嵐』なのだが、どちらの映画でも、レビュファやプロフィと共に、楽しそうにシェロをかつぎながら(!)山を登るバケのユーモラスな姿(ロベル・ドワノーの写真でも有名)が、これらの作品を実際に味わい深いものにしている。そして、山の頂きで演奏されるシェロの響き。そう、やはり山にはシェロがもっとも似つかわしいのだ。



自然まかせ

幸田 修治 | gi



「仕方なかろうもん！」また機屋さんに言われた。そう、仕方がない、自然相手のことだから、まったく仕方がない。久留米かずりは織り上げるまでの工程で、糸を染めでは天日干しを繰り返し、反物に織り上がってからも洗っては天日干しをするために、ある意味、自然まかせな部分が大きく、もう雨が続いた時には全然予定通りに反物が上がってこない…。こっちにも都合があるんだし、そんな事も考え随分早くにお願いしてたのに！

「まあ、あきらめんね！」

今の時代、スケジュール通りに行かないのは厳しいけれど、湿気によりシャトルのすべりが変わりったり、染色によるじみ、天日干しによる発色のよさなど、自然の法則による作意のないズレがかすり最大の魅力だから、まあ「仕方なかろうもん！」かな？

今日も朝から雨が降った、もしもお客様に「仕方なかろうもん！」と言えたら、少しは機屋さんみたいな大きな人として、1歩登ることができるかな？

gi

福岡市中央区浄水通3-3 浄水フラツツ1F TEL 092-531-1411 <http://www.gikame.com/>

山のジュエリー 杉山 慎治 | SOURCE

まず始めに断つておくと、本気で山に登るのであれば、身に着けているジュエリーは全て麓においておくことをお勧めしたい。万が一、天候不順になって雷雲が頭上に現れたら、あなた目掛けて落雷が襲うかもしれない。また、頂上付近に差し掛かった頃には、小さなそれさえも重荷になるのではなかろうか?だったら同じ重さのチョコレート片の方がずっとあなたのためになる。しかし「人生、山あり、谷あり」なんて言葉があるように、人の生きる道はまさに山登り、そして山下りの連続のようにも例えられる。そんな山への挑戦ならば、ジュエリーの存在がチョコレートより優れている場合もあると考えてもよいだろう。太古の時代よりパワーストーンと呼ばれる天然石(宝石)にはその種類によって様々な効果があると信じられてきている。有名な話のひとつにエメラルドについてがある。調和や治療の効果があるとされるその石は絶世の美女と称されるクレオパトラに愛された。美しい緑の石に魅了されたクレオパトラは身に着けるだけでは止まらず、それを碎いた粉末を化粧品代わりに使っていたという逸話まである。もしかしたら、それが彼女の美の秘訣だったのかも…。まるで都市伝説のような話だが、石の効果を考えれば真実味がないわけではない。エメラルドの他にも、勝利や栄光を導くルビー、愛を招くローズクォーツ、金運の象徴であるシトリンなど、宝石はその輝きだけではなく、その意味にも惹かれるものである。そんな気持ちでジュエリーを楽しんだら、その輝きはより一層増して映ることであろう。また我々の目の前にそびえる山々も幾分小さく見えてくるのかもしれない。さて、そんなことを強く思うようになったのはちょうど1年程前のこと、クリスマス前に新しい商品の企画を練っていた頃である。調べていると石のあれこれと同じように、指輪をする指にもそれぞれの意味があることを知った。幸せやチャンスを逃さないように小指にするピンキーリング、直感力を高めてくれるとされる中指にする指輪など、5本の指すべてにやはりそれぞれの意味がある。そんな指と指輪にまつわる物語に惹かれて作ったのがFINGERSと銘打ったシリーズ。そしてその中にちょうど山のマークを刻んだものがあったことを、このコラムを書かせてもらう機会に思い出した。親指はその文字からも分かる通り父親を象徴する指であり、つまりそれはリーダーを意味する。先頭に立ってどんな困難にも邁進し、乗り越えていく、前向きな姿勢を意味する指であり、親指にする指輪にはそんな意味が込められている。だったら、

と思い、それにちなんでPOSITIVEのメッセージと一緒に山のマークを刻んだ指輪を作ったのだった。人生の中に存在する山々への挑戦に、いざというときは背中を押してくれたり、ときには立ち止まらせてくれたり、なにかきっかけになってくれる存在であったら幸いかと思っている。ただし、くどい様だけど、この指輪でも本当の山に登るときには外して、チョコレート、もしくは飴玉をポケットへ。





ここにある3本脚のウッドスツールは、肉厚な座面とズドーンと未広がりの脚が見事な力強さ。人によっては、目を丸くするような素っ頓狂なバランスのスツールをデザインしたのは、フランスのデザイナー、シャルロット・ペリアン(1903-1999)。山好きの彼女が、スキーロッジの為にデザインしたものです。

以前パリのポンピドゥーセンターで開催されたシャルロット・ペリアン展で、1枚の写真に目を奪われました。それは雪山を背景に、上半身裸で思いきり両手を挙げたペリアンの後ろ姿。1935年に撮影されたもので、フランス人といえど当時はなかなか奔放なポーズでしょう。山岳地帯の澄んだ空気を身体いっぱいに取り込もうとするその姿はじつに情熱的で、雪までも溶かしてしまいそう。

そして先日、実際にシャモニ・モンブラン山頂近くを体験したのですが(標高3800m)、そこはあまりの寒さに1分で感覚が麻痺しあげるほどの厳しい気候。ペリアンがポーズをとった撮影地の標高が低く季節がよかったと考えても、上半身裸なんてとんでもない!その時あらためて、彼女がいかに"好奇心を具現化していく"強者だったのかを思い知られ、現代人を魅了する彼女の力強いデザインの根源を、展望台で寒さと一緒に噛み締めたのです。

そんなペリアンのスツール、最大の魅力は「第一印象で人を困らせる」こと。出会った瞬間に見た人がどう反応すべきか一瞬とまとってしまうようなものほど、実際は人を惹き付ける魔力を持っていると、家具屋を生業にする私は信じています。当たり障りのない形と素材で「ほら便利でしょ」と、するとアピールしてくるものは私にとって魅力なし。どころか、たちの悪いウイルスみたいで時には不愉快。出会いたいのは、デザインした人の腹の底が見えてくるような、ユーモアと根性あるデザイン。それは家具に限らず、食べるもの、着るものすべてに通じてきます。ペリアンの愛嬌あるスツールはちょっと足首太めですが、私にとってその象徴なのです。

二輪の愉しみ

江口 啓太郎 | 自転車愛好家

私たちは多くのモノに囲まれて生活している。ある時期それが豊かさの象徴だったかもしれない。そして、それぞれが一体どんな仕組みで動いているのか理解していないものも数多くあることに気づく。「いちいちそんなこと気にしていたら生きていけない」のが現代人の宿命なのかもしれない。

しかし、疑わずに従う。というのははとても危険だと思う。まるで宗教のようだ。街を歩いても、雑誌を眺めても、どこかで誰かが私たちにモノを売ろう売ろうとしている。その勧誘があまりにしつこく日常的になってしまったため私たちの感情はマヒしてしまった。

ならばどうすればいいか。できるだけ原始的な機械を生活の中に採りいれるべきではないだろうか。例えば、自転車とか。

自転車はスプーンほど単純な道具ではなく、携帯電話ほど複雑な機械でもない。なにがどう動くから車輪が回るのか、見ていて歴然とわかる。しかも、その動力はバイクのようにエンジンではなく、私たちの足なのだ。

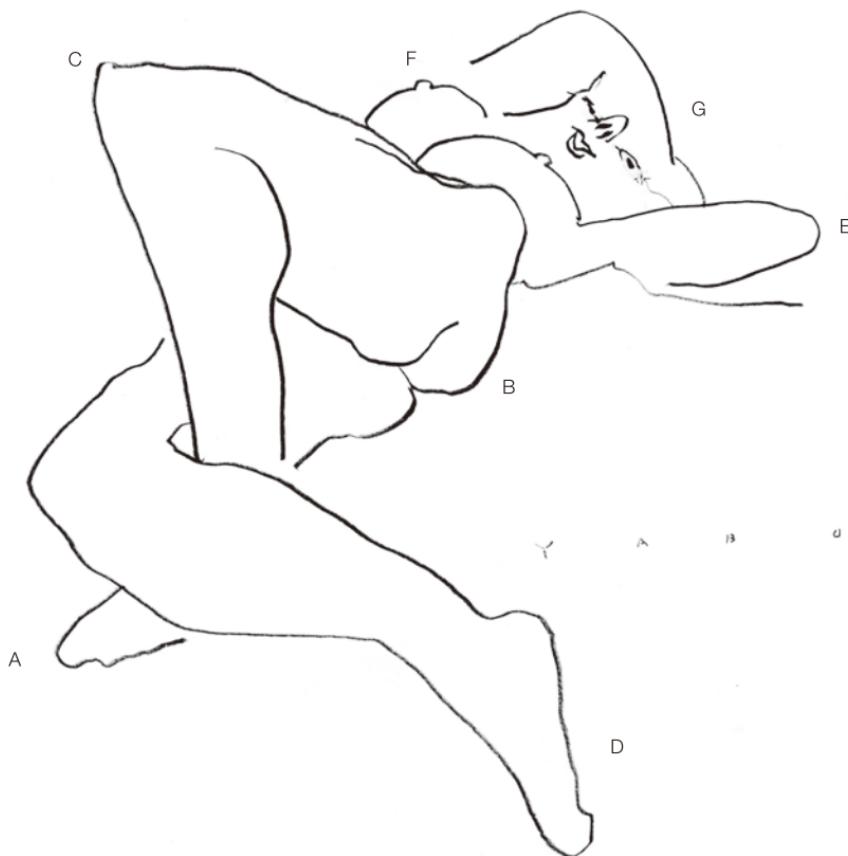
自転車に乗って心地よいと感じる人は少なくないと思う。身体にかかる負荷と、本然的に孤独を要求する乗り物が快樂だなんて、なんてマゾヒスティックな乗り物だろう!なんてね。心と体。が不可分であり私自身のものであることを再認識させてくれる。花の香りに気付き、ご飯がおいしく食べられる。ということ。

そして、できるだけ身軽さを求めるようになる。動きやすいこと、持ち物が少ないことは良いことだと考えるようになる。より機能的で、用途にあつたモノ選びをするようになる。エコとか、健康とか言う前にこれが大事なんじゃないかと思う。これは少し山登りと似ている気がする。

ぼくら人間について、大地が、万巻の書より多くを教える。理由は、大地が人間に抵抗するがためだ。人間というのは、障害物に対して戦う場合に、はじめて実力を発揮するものなのだ。もっとも障害物を征服するには、人間に、道具が必要だ。人間には、鉋が必要だったり、鋤が必要だったりする。農夫は、耕作しているあいだに、いつかすこしづつ自然の秘密を探っている結果になるのだが、こうして引き出したものであればこそ、はじめてその真実その本然が、世界共通のものたりうるわけだ。(サン=テグジュベリ著 堀口大學訳『人間の土地』冒頭より)

けを友に文学を大成させたように、僕のような俗人は自転車を使って、世界を認識しようと試みる。幼い頃、三輪車を卒業して小さな自転車を買い与えられたとき、「あまり遠くへ行ってはいけない」という親の一言が逆に僕の想像を掻き立てた。空を翔る飛行機ほどではないけれど、自転車は地上の自由を与えてくれる。





ダンナどのルートで登るか？

箱根生活 ナリタアイコ | Elmo-Lewis inc.

それは、オットが一人で決めてしまった家の購入から始まった。結婚してから何度か訪れた事はあったが、大阪生まれ、大阪育ちの私にとって「山」「田舎」「何もない」のいい事なしだった。もちろん我が家が持てる事は嬉しい。しかし元別荘だったその家は、ムダに広く、外観がタイルの洋風(?)、庭は典型的な日本風で、そのミスマッチ加減がどうしようもなかった。庭を覆い尽くす程のつつじにモミジに笹。完全に和風。おじいちゃんとお茶。とほほ。

外観をいじるのは金額的に無理だったので、二人で庭を何とかしようという事になった。手入れがされていなかった為とんでもなく荒れ放題。とりあえずオットが大量のつつじを引っこ抜く事に。「ツツジ狩り次郎」とでも名前を付けたい程、オットは気持ちいいくらい豪快に引っこ抜いてくれた。一方、笹は手強かった。根っこが深く、剪定バサミで切るしかなかった。もみじも虫にやられて枯れかかっていたので1ヶ月掛かりで抜根した。つつじと笹がなくなつてからは、何故か私が鍬を担いで耕すようになつた。毎日、ほっかむり、首に手ぬぐい、長靴という出で立ちで、硬い土が柔らかくなるまで何度も耕した。引っ越したのが7月だったが、標高700mに位置するのでとても涼しく、真夏の作業も苦ではなかった。と言うより、むしろ楽しかったような気がする。そんな毎日が11月まで続いた。

箱根に住む前は、足柄山の麓に住んでいたのだが、家から20分ぐらい歩いた所にハーフガーデンがあった。散歩がてら登り、そこでよくハーブを買って帰ってきてはブ

ランターで育てていた。料理に使う程度のかわいい園芸だったが、無論、庭や畑を作ろうと思った事はなかった。そんな私が鍬を担いでいるなんて考えられなかつたが、自然とそうなつた。

寒い時期は、はっきり言って庭仕事がない。景色と共に私の心も寂しかつた。なので街に下りた時に園芸書や畑仕事の本を買いまくって読む。そしていろいろ妄想する。頭の中では既に庭と畑が出来上がつてゐる!ようやく3月になると、待ちに待つた種まきシーズン。せっかくなので珍しい海外の種や、オシャレな野菜の種を買ひ漁つていたので、少量多品種で蒔く。種から育てるなんて、すっかり園芸にハマつてゐるじゃないか。

種まきは楽しい。あの可愛らしい双葉が、湿つた黒い土から顔をのぞかせる。その生命力と言つたら!感動の嵐だ。その後は本を片手に支柱立てや剪定をテキトーにしていれば、それなりにそれぞれの野菜ができる。ハーブなどのコンパニオンプランツの助けを得ながら、その野菜の適切な季節に育てれば、薬を使わなくてもさほど虫もつかない。なんてスバラシ!

…そんな楽しくなつてしまつた箱根生活だったが、残念ながらオットの仕事の都合で家を手放して東京に住む事になる。東京に連れて行けなかつた植物たちは、箱根の知人の土地で今でもすくすく育つている。そして原宿の事務所のベランダでは、ハーブと野菜が育ち、当たり前のようにお昼ごはんの食材の中に入つてゐる。しかし箱根に呼ばれてか、東京から脱出して現在は丹沢の麓に住んでゐる。次こそ箱根で定住なるか?!



妄想だと住める気がする

有吉 祐人 | Spumoni, ENOUGH

山に住みたいの?と聞かれると躊躇してしまう自分がいるのも確かだけど、山に住んでみたいと思う反面、日々の生活がそれを拒否している感じは否めないところ。別に山仕事や自給自足の生活に憧れているわけではないけど、少し住んでみる事にする。丘陵地の雑木林なんかでそばに渓流があって美味しい水が湧き出ているような所がイメージ。景色の中には山が見える事が前提。ブナやケヤキ、カバなど木々が立ち並ぶ一角に、自分でイメージした小さなアトリエ付きの家を建てる。とても小さな家だけ必要な物だけある事にしよう。そうだ靴で暮らそう。プランもシンプルにリビングとキッチン、ベッドルーム、バスにトイレ、窓は大きな方がいいな、やっぱり木造かな、コルビジェの小さな家も憧れはあるけど、木の香りがする空間が今の気分。かといってログハウスではない所が難しいところもあるけど。広めのデッキテラスは欲しい。雑木林の木漏れ日の中で読みかけの本とうたた寝、BGMは自然まかせ。夜はオーガニックな食材をダッチオーブンでシンプルに料理、自分で焼いたパン、朝釣つて来たヤマメのスマークなんかと一緒にワインでもといきたい所だけあいにく僕は飲めないので、近くで汲んでき来たミネラルウォーター、炭酸が入っていると尚嬉しいがそうそうはないのでそこはガマン。食事の後はお気に入りのイスと暖炉の前で薪を焼べる、真空管に柔らかい灯がともり自分で焙煎して煎れたコーヒーを片手にコードにハリを落とす。ラックスマンとタンノイの組み合わせは優しい音をしてくれる。そばでは巻きかけのフライヒルアー、まだ濡れているウエイダーとシューズ、週末は友人達と……。なんて妄想を移動中のリアルな景色とコラージュさせながら行く場所々で落とし込んでいく。以前行った小国にあるクヌギの森美術館はイメージに近い気がしている。多分、僕らは人生の半分を妄想の中で生きている様な気がしていて、現実と妄想の中を行ったり来たりしていることはすごく大切なことのような気さえもしている。最初に戻る、山に住みたいの?と聞かれると今の僕は間違いなく住めないと答える。“住めない”というより“住みこなせない”という方が正しいかもしれない。どちらにせよ憧れであることは確かなので、そんな大人になれるのか、これからのこと少し考えてみようと思う。



山は雲仙

泉 哲雄 | trouville

物心ついた頃から僕にとって、山は雲仙だった。何故なら、当時長崎のローカルTVでは「ヤマは～うんぜん」という雲仙の旅館のCMが流れていて、幼かった僕の頭の中に、まるでサブリミナル効果のごとく「山と言えば(富士山でもアルプスでもなく)雲仙」が刷り込まれていたわけだ。ただし、僕の生まれ故郷から雲仙までは車で30分、歩いて登る事はあまり現実的ではない。その上、とにかくカーブが多く少しでも三半規管が弱いと軽く車酔いする。大人になった今でこそなんとか我慢できるようになったが、幼いころは苦痛だったよう思う。

雲仙は長崎県島原半島の中ほどの標高700メートルに位置し、豊富な温泉や自然に恵まれ、夏場でも過ごしやすい所だ。そのため、明治の頃より外国人の避暑地として親しまれてきたが、特に1930年代以降、日本の国際観光政策の下、アメリカのマスツーリズムを受け入れて外貨を獲得しようとした。ただ、今となっては九州の温泉避暑地と言えれば、湯布院や黒川が代名詞となり、日本で初めての国立公園に指定され観光客が溢れていた当時と比べると、今の雲仙に元気があるとはいえない。

そんな雲仙に、帰省する際必ず立ち寄る場所がある。「雲仙觀光ホテル」といって、今から75年前に建設されたスイス・シャレー風建築である。竹中工務店が設計施工を手がけた初めてのホテルとして有名らしく、設計を担当した早良俊夫氏は、現存はしていないが、当時日比谷にあった喫茶店「日東コーナーハウス」(1938年)などモダニズム的な作品も生みだしており、竣工の5年前には、かのヴォーリズと仕事をした影響からか、西洋の建築と日本の建築を見事に融合したクラシック・スタイルを生み出している。壁紙は全てウィリアム・モ里斯・デザインであり、近代日本の名建築や登録有形文化財に認定されている。(こうやって活字にすると由緒ありすぎる建築物のようであるが、毎回珈琲を飲むだけに訪れる僕にとって、ベテランらしき年配のボウイさんの配慮のおかげか、敷居の高さを感じたことは一度もないのだが……。)

近くの「九州ホテル」では飛ぶ鳥を落とす勢いのトラフ建築事務所がスベニール・ショップの什器を作成し、一部では話題になっているらしい。一方、雲仙觀光ホテルは「そんなの関係ない」と言わんばかりに、エントランスからホテルに入るとノスタルジックな装い。そして堂々とした建築美。ロビーに敷かれた絨毯、真鍮のドアノブ、踊り場におかれたアンティークの椅子、どれをとっても美しく、長い年月を経過したホテルの細部にはPATINAの風格さえある。

山の楽しみは紅葉や登山だけではない。非日常的な空間を求めるため、それだけでも山に登る価値はあるはずだ。



Puce 野見山 智一郎 | Soichiro Nomiyama Design, ENOUGH



Soichiro Nomiyama Design
<http://www.snnotes.blog99.fc2.com/>

海男 河崎 政芳 | Publik:

五十路をすぎて波のりなるものにのめり込み一年が過ぎた。友人たちは「自分のトシを考えろ」などと余計な心配をしてくれるのだが、異性への興味などどこかへ飛び去ってしまい「波のりはセクシーな行為である」と、どこか自分をむりやり納得させて、せっせと海辺へ通っている。

波のりでは不文律なるものの存在が大きい。広く知られているものは、「前乗り禁止」というルール。これは、自分より沖の方から波に乗ってきた人がいたら同じ波に乗ってはいけない、という決まりごとだ。そして、もっとややこしいものに「ローカリズム」なるものがある。

どこか人里離れたサーフスポットに行き、そこにはすでに数名の波のりたちが遊んでいたとする。もし自分が百戦錬磨、バリバリのプロサーファーで、その先客たちの誰よりもウマかったとしても、彼らが昔からそのスポットへ通いつめ遊んでいる人たちであれば、彼らの方が優先されるのである。海はみんなのものである……。はずなのだが、大洋のはるか彼方で大風が吹き、ひとつの波が前の波に追いつきひとつになり、その波がまた前の波に追いつき、ドンブラコ、ドンブラコしながらやがて大きくなうねりとなり、それがほどよい地形の岸辺へとうち寄せ、ほどよい風と汐の具合と重なったとき、海はみんなのものではなくなるのである。サーフスポットのボスがその他のローカルたちにリスペクトされていないと混乱したスポットとなり、その逆であればビジターでもローカルたちに対し深い敬意をもって遊んديれば、良い波をいくつか譲ってくれたりする。私は九州の片田舎へ通っているのだが、同世代のローカル・ボスが、ナニワナンバーのデカいバンで乗りつけ海に入ってきたタトゥーをいっぱい入れた3人のニイちゃんたちを「オイ、ローカルをナメたらイタイめにあうぞっ！」とドヤしつけるのをすぐそばで見たことがある。あとで聞いたのだが、このナニワのニイちゃんたちのひとりが、あるローカルの前乗りをしたらしい。このボスは家にいたのだが、連絡を受けてすぐに駆けつけて、ボードをもって海に入り、先の場面となつたらしい。

ローカリズムというものは、かのごとく辺境的、閉鎖的なものなのだが、私はこのローカリズムのありようは、いいんじゃない?と思っている。日本全国津々浦々、道路や交通網が整備され、ホントのいなかや辺境が消え去っている現在、せっせと通いつめ、あいさつを欠かさず、顔をおぼえてもらい、だんだん話ができるようになり、常に謙虚さと良識を持っていれば、いつしかヨソものではなくグループのメンバーとして認めてもらえる……。私は、この時間と手間がかかるプロセスを楽しくさえ感じている。紙きれ一枚出せば、メンバーになれる、という訳ではないんである。

くだんのローカルのボス。彼は、ローカルたちを無礼な外敵や非常識なヨソものから守り、グループの統制をとり、メンバーが楽しく遊べるよう目を光らせている。これは何かに似てるゾ、と思うのだが……。そう、サル山のボスである。五十路のサーファーは、残された時間のなかで五体満足なうちに、あと何本のバーフェクトな波にのれるだろうか?と考えるのだが、サル山の老ボスたちも、あと何匹の若オス猿をボコボコにして、あと何匹の若メス猿の上にのっかれるだろうか?と考えているにちがいない。



Publik:

福岡市西区豊浜 1-7-14

TEL 092-882-9222 <http://www.publik.jp/>

bread, butter, and champagne

こいで しんじ | petrol blue

山=マウンテン…バッと頭に浮かんだのは、喫茶「マウンテン」だった。そういえば、クドカンのテレビドラマでTOKIOが唄っていましたよね、♪ラララ～そりゃ「マンハッタン」!(やれやれ)。マンハッタン…小さい頃好きだった菓子パンであり、(バーの店長としては、これをいつとかなきゃね)カクテルの女王の名前でもあります。しかし、いわゆるショートカクテルと呼ばれるものは、ウチでは出しています。「どうして?」(愚問だね)。「まさかとは思うけど、シェーカーふれない…なんて事はないわよね?」(ソンナジャスイハウэнザリダ)でもあなたがち間違っているとは言えないかもね…。『マンハッタン』は、向田邦子さんの短編作品のタイトルでもあります。そう、向田さんといえば、ミリー・ヴァノン『イントロデューシング』(スタカンではありませんよ)が愛聴盤であった事は有名な話です。少し冷たく、深く、暗い声、その歌声もさることながら、ジャケットのデザイン。モノクロに挿された、ほんの僅かなボルドー。全てがモノクロだと寂しすぎるし、カラーだと味気ない。良いですね、音が滲み出ているアルバムジャケット。絶妙です。このアートワークを見ると、1つの映画とCMを思い出します。映画はコップラの『ランブルフィッシュ』。モノクロ映画の中で泳ぐ赤と青の鯛魚。マット・ディロンもミッキー・ロークも超クール。マット・ディロン、モノクロ、オクラホマつながりといえば、写真家ブルース・ウェーバーが製作・監督した、チエット・ペイカー(オクラホマ出身)の全編モノクロのドキュメンタリーフィルム『Let's get lost』。ポスターに、アルバムジャケットに、そして写真集に、"bread, butter, and champagne"と書いてあり、これは映画の後半、チエットがほんの一瞬放った言葉なのですが、この一瞬のフレーズを切り取る感性がとても好きです。おっと、話を戻して、20年程前に流れていた、『OLD FORESTER』というバーボンのコマーシャル。幻想的なモノクロ映像の中にひらひらと舞う鮮やかなグリーンの葉。完璧なコントラスト、完璧なBGM(♪Wonderful Life / BLACK)、すっかりやられてしまった僕は、ハーバーでもローゼズでもなく買ってしまいました(近々お店に置こう、こんな選び方でもいいですよね?)。ひらひら枯葉舞う季節には、サラ・ヴォーンのスキヤット全開♪枯葉は相当良いナ。でも僕の1番のお気に入りは、ビル・エヴァンスの絶頂期と言われているリバーサイド時代、『Portrait in Jazz』収録の♪枯葉ティク1.(ようやく頂だ!)。このアルバムB面最後の曲のタイトルは♪BLUE IN GREEN。『Let's get lost』サウンドトラック最後の曲は♪ALMOST BLUE、こちらpetrol blue、青とのつながりを待ちながら、求めながら、今夜もカウンターに立っています。



petrol blue

福岡市中央区大名1-10-21 大名エイトビルII 5F

TEL 092-714-6786

<http://melody215.exblog.jp/>

単純なこと程

田中 純二 | TOWN CRAFT, ENOUGH

わかりやすい。

必要。

魅力的。

機能的。

できそうでできない、

でもたまにはできる。

おもしろくなさそうでやったら結構おもしろい。

その逆。

感動する。

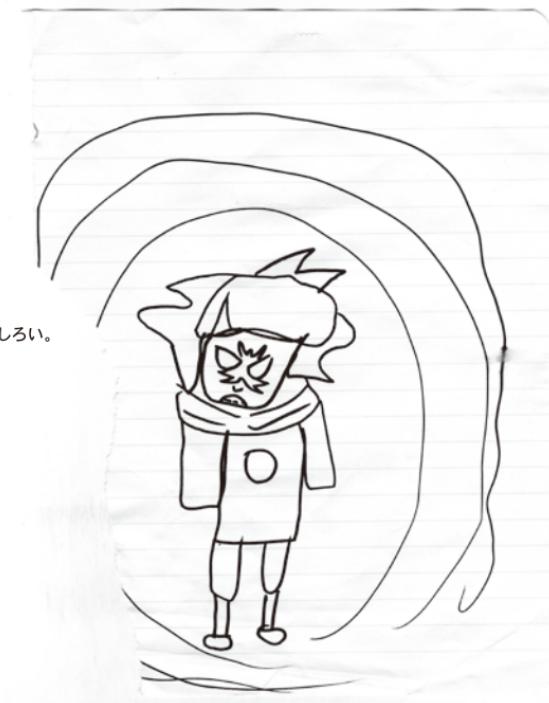
迷う。

考えさせられる。

深い。

難しい。

おもしろい。



単純なことを第三者の立場から観る分には無責任な感情で觀ることができておもしろい。しかし物をつくる側の僕にとって単純なことは悩ましい。なぜなら複雑に考えてしまうからだ。単純な物をつくろうとすればほどスパイラルに落ちていく。そして忘れた頃に案が出てきたりする。実は単純なことは複雑な過程の中から産まれてくるんじゃないって思ってしまう。僕自身単純で素朴なものに惹かれ、そんなデザインをしたいと思っている。しかし世の中が複雑な方向に向かっていて、自分自身もおそらく無意識のうちに複雑になっている今、その狭間で試行錯誤、もしくは右往左往している。そんな今だからこそ単純になる事が自分にとって大切な事なのかもしれない。でも単純なことが一番良いとは思っていない、単純なことが最もおもしろいと思っているだけだ。そして最も難しいとも思っている。だからそこに向かいたくなるのかもしれない。もしかすると自然を相手にする登山家もただひたすら登るという単純な行為の中で僕らが想像もしていない何か素晴らしい答えを見つけているのかもしれない、だったら僕も物づくりの答えを探しに時間を見つけて近くの山にでも登ってみようかな。

こんなこと考えて文章を書く自分は多分複雑だ。出来ることなら子供達が描く絵の様に迷いのない単純な感情での物づくりを続けていきたい。

オニオンクリームスープ4~5人前の作り方

重藤 桂子 | tulip soup



<材料>

・玉葱	4個	鍋にバターを入れて弱火で溶かします。
・牛乳	500 ml	溶けたらそこへごま油を加えます。
・チキンブイヨン	500 ml	スライスした玉葱を鍋にいれ、
・小麦粉	大さじ2	塩少々をふり入れ弱火でじっくり炒めます。
・バター	30g	焦がさないように、時々優しくかき混ぜながら、
・ごま油	小さじ1	じっくりゆっくり丁寧に。
・塩	少々	常に玉葱をみていてください。
・胡椒	少々	あま~く美味しい玉葱に変身していきますよ。
		綺麗な飴色になったら小麦粉を少しづつ入れていきます。
		このとき木べらなどで玉葱を混せながら、
		固まらないようにチャチャッと手早く混ぜます。
		小麦粉を入れ終えたら次は牛乳、
		こちらも木べらなどで混ぜながらゆっくりゆっくり
		注いでいきます。ここまでずっと弱火のままです。
		"ツツツツ"っと沸いていたらチキンブイヨンを加えます。
		最後に塩とこしょうで味を整えて完成です。
		美味しく作るこつはただひとつ!
		食べる人のことを想って、
		玉葱をゆっくりじっくり優しく2時間炒めてあげてください。
		寒い季節にぴったりのとろ~りクリーミーなオニオンクリームスープです。

ヴァンデミエール版 "秋月記" 矢野 薫 | 葡萄月

先日、300年前から変わらぬ住所である「館の裏」に住むW氏が鹿の肉をくれた。

塩とショウガだけ焼いて、オーガニックのシチリアワインと合わせてみた。

淡白ながらも、野生肉の堅さとコクには、

ネロダーヴォラのダークチェリーや草花のニュアンスがよく合って旨い。

どちらも山育ちだからなあと思った。

そういうば、ここ秋月で仕事を始めた四年前の春、

しんとした山の空気を吸いながら夕暮れに霞む古処山を見ながら畠で立ちショーンしていた時のこと、

裏の竹やぶの斜面からいきなり子鹿とrippaな角の雄鹿が飛び出して来て目の前を駆け回った。

それは何が起きたか一瞬判断らぬほどの迫力だった。

ふざけて駆ける子鹿とそれを追う親鹿には、僕の存在など気にもならないようだった。

二頭が通り過ぎる度、野生の臭いと低い声がぼくを動けなくした。

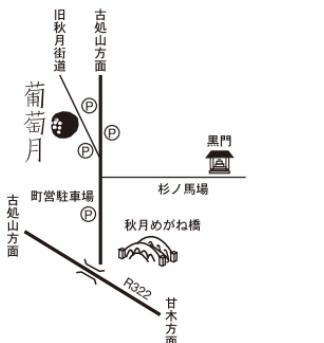
その春、鹿の親子は、しばらく畠の野草を食べにやってきたが、

「バンビだ、かわいい!」とはいかなかった。

今思うと、野生の気高さというか、神々しさと静けさを感じ、

毎夕やって来る鹿たちを窓越しに黙って見ていた。

残った刺身用の分にはアルザスの辛口リースリングなんかどうだろうか。



フランスヴィンテージワイン
版画、民芸陶器、アンティーク雑貨
le vandemiaire | select
wine et
bric à brac
葡萄月 | ぶどうづき

葡萄月

福岡県朝倉市秋月町野鳥761-1 TEL 0946-25-1025 10:30 AM - 5:30 PM 水曜定休日

YODEL創刊にあたって

「なぜ山に登るのか?」と問われた著名な登山家が、「そこに山があるから」と答えたという、有名なエピソードがある。当意即妙な答は、山男が持つ豪放で実直なイメージにピッタリだ。ところが最近、実はあるジャーナリストの創作だったことが判明したらしい。確かに、周到な準備をし、命を賭してまで登る山である。到底、生半可な気持ちではなかったはずだ。フランスの思索者ベルクソンが言つたように、山を外面から眺めているだけでは決して分からない、「直観」みたいなものに魅了されたのではないだろうか‥‥。

ある時、プラスティックの椅子が表紙を飾った雑誌を目にした。私鉄の駅のホームにフリーにありそうな座面をした椅子なのだが、この一見何の変哲もないカタチこそ、ずっと探していたモノの化身に違いないという、直感(NOT「直観」)めいたものが働いた。思えば、それがきっかけとなり、矢も楯もたまらずシゴヘ飛び、チャールズ・イームズがデザインした古い椅子を買い付け、日本へ持ち帰ることになったのだろう。そうやって座った椅子の座り心地が、思っていたよりずっと良いことを、驚きと共に初めて実感(ALSO, NOT「直観」)することになる。

ところで、「直観」とは一体何なのだろう。ベルクソンは、それを「意識の自由」と呼んでいる。しかばば「意識」とは、それは「記憶」であり、当てになつたりならなかつたりする「過去」のことである。そして、「現在」とは実は「記憶になつていない意識」ということになる。なるほど、意識とは時間と共に刻々と変化するものなのだが、突然、そこにある躍進が生まれる瞬間がある。それを「直観」と呼ぶわけで、それは同時に「内から見る」ことでもある、と。そう、「直観」とは随分ややこしい話なのだ。

そういうは、小学生時代を佐賀県の内陸部で過ごしたため、海にはあまり縁がなかった。そのかわり、父のお供をして山へよく登った。春、山の急斜面に自生したわらびやゼンマイを見つけたり、夏の盛り、ヘトヘトになりながら石清水でのどを潤す幸福を知ることができた。山と椅子。まるで精神と物質の比較のよううで、少し乱暴な氣もするが、どちらも「直観」するには格好の対象だったような気がする。もちろん、本当に「内側から直観」できたかどうかはあやしい過去の話なのだが‥‥。

山の尾根に立ち、向こう側の尾根の方角へ、力の限り「オーイ」と叫んでみた。そして、少し遅れてはね返ってくる山彦を、今か今かと待っていた。レスポンスはあったり、なかつたりした。ところが、これから先もずっと、僕は向こう側に向かつて、なんだか訊の分からぬことを叫び続けるような気がする。その時は、いつのこと「ヨロレイヒー!」と叫んでみようと思っている。

武末 充敏 (organ, ENOUGH)

YODEL 1

発行日：2009年12月1日

編集発行人：武末 充敏

デザイン：野見山 聰一郎

協力：ENOUGH

発行：organ

〒815-0033 福岡市南区大橋1-14-5 TAKE-1ビル4F

Tel 092-512-5967

E-mail info@organ-online.com

Url <http://www.organ-online.com/>

YODEL NIGHT BAZAAR



organ

18 FRI - 20 SUN, DECEMBER, 2009

"娘さん、ヨク聞一けよ…" YODELナイト・バザー
12月18(金)、19(土)、20(日)の3日間 @organ 19:00 - 22:00

師走の忙しい時期に何なんですが、
YODEL発刊記念をかねて「ナイト・バザー」を開催します。
参加するのはorganをはじめENOUGHの面々。
それにgi、Tulip Soup、Petrol Blue、Publik:、
葡萄月さんなど、YODELに協力してくださるみなさん。
それぞれの特色を生かした内容は、デザイン・アイテムはもちろん、
雑貨や洋服をはじめとしたナイスな品々とプライス。
ビオワインでもやりながらの値切り交渉もありです。
仕事帰りにでも寄っていただけるように、
夜10時までやってますヨ。みんなでワイワイやりましょうか。